関西大学文化交渉学研究拠点
Sep. 2024 No. 10

関西大学文化交渉学
ICIS NEWS LETTER
ニューズレター

CONTENTS

— 福井での東アジア文化交渉学会に参加して
— 東アジア文化交渉学会
第16回国際シンポジウム開催報告
— ICIS 国際シンポジウム
「北欧から来た宣教師と戦後日本」

福井での東アジア文化交渉学会に参加して

2024年の東アジア文化交渉学会は、久しぶりに関西大学が担当して開催されることになった。テーマを「東アジア学の新展開」として、2024年５月10日から３日間にわたって開かれた。文化交渉学会としては、第16回大会に当たる。会場は、福井のあわら温泉清風荘である。あわら温泉の付近は、北陸新幹線が開通したばかりということであり、乗り換えの新幹線敦賀駅、芦原温泉駅なども、真新しい施設が目立った。

オンラインも併用されたが、国内外から数百名を超える会員が参加、発表を行うと同時に、日本の温泉文化を楽しんでいた。集団で宿泊する温泉宿の文化を多くの国々の人たちが体験し、ある意味、まさに文化交渉の現場でもあったと考える。

あわら温泉の地区には、「藤野厳九郎記念館」が存在する。芦原町と中国の紹興市が友好都市であり、その関係で設立されたものである。藤野厳九郎とは、魯迅の仙台医学専門学校時代の師であった人物である。魯迅の「藤野先生」は、中華圏でも、日本でも教科書に載る有名な文章であり、多くの人が読んだ記憶があるはずである。ただ、藤野先生自身は、自分が魯迅の文章のその人物だとはずっと認めなかったようである。いまでは、藤野厳九郎が藤野先生の名であることは、よく知られるようになった。

エクスカーションでは、福井有数の名所である東尋坊と、永平寺を訪れる企画が催された。こちらも好評であったようだ。

永平寺は曹洞宗の本山であり、国内外に名が広まっている名刹である。臨済宗と曹洞宗は、宋の時代の禅宗を受けて設立されたもので、当時の日中文化交流の強い影響のもとに発展した。そして、当時の禅宗文化の多くは、本場中国では廃れてしまっている。宋代の仏教を知りたかったら、臨済宗と曹洞宗の寺院を訪れるべきであると考える。その意味でも、永平寺を訪れることは意義があっただろう。

あわら温泉は、期せずしていろいろな文化交渉を知るための材料に溢れた現場であったと思う。特に、日中の文化交渉をよく知るために適した場所であった。開催地を選んだ先生方のご慧眼に感謝したい。

（東西学術研究所長
関西大学アジア・オープン・リサーチ センター長
二階堂 善弘）

ICIS 国際シンポジウム「北欧から来た宣教師と戦後日本」

ICIS 国際シンポジウム「北欧から来た宣教師と戦後日本」の開催にあたって

都市遺産と宗教文化研究班は「東アジアの都市遺産と宗教文化」を研究テーマとする研究班で、東アジアの諸都市に展開した文化遺産のうち、寺院・神社や宗教文化に関する事象や要素について、その歴史的・文化的変遷を考察することを研究課題に掲げている。

今回の国際シンポジウム「北欧から来た宣教師と戦後日本」は、大谷渡氏が長年にわたって研究してきた北欧から派遣された宣教師と戦後日本の若者との精神的・宗教的触れ合いに関する研究を、長く宗教伝道に携わってこられた当事者に直接語ってもらうことで、さらに深めようとする試みである。これは西洋と東洋との宗教的接触を考える上で、きわめて興味深い研究テーマで、本研究班の研究課題とも一致するものである。

開幕にあたって、西本が「宗教伝道と古代都市」と題して日本古代史の観点から報告を行い、引き続いて、インゲル・ポールソン、田中富貴子、大谷渡、橋寺知子の各氏がスウェーデン人宣教師の日本伝道に関わる報告を行った。最後に劉文婷氏（関西大学大学院博士課程後期課程）が「日本統治時代の高等女学校と台湾－台南及び高雄を中心に－」と題して、北欧から来た宣教師たちの伝道活動とも深く関わる台湾における女子高等教育と女性の社会進出の問題について、日本統治時代を中心に報告した。

ICIS国際シンポジウム
ポスター

スウェーデンなど北欧から来日した宣教師たちは、敗戦・復興・高度成長へと激変する戦後日本の地域社会のなかで、愛知・兵庫・京都・石川・山梨小笠原・甲府などの各地に教会を設け、混乱期の社会のなかで新たな道筋を模索している青年たちと、さまざまな形で精神交流を果たした。本シンポジウムでは、歴史の闇に消え去ろうとするこうした尊い営みを掘り起こし、後世に伝えようとする試みが紹介された。

（都市遺産と宗教文化研究班 主幹　西本 昌弘）

回想報告「スウェーデン人宣教師の日本伝道四十年回顧」

私はスウェーデンのゲーテボルゲ（ヨーテボリ）市に生まれました。税務署で12年間働いたあと、同市のペンテコステ教会から派遣されて来日しました。スウェーデン人のウィルヘルムソン宣教師は1957年に山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原（現、南アルプス市）に入って開拓伝道を始めました。私はウィルヘルムソン宣教師の伝道を引き継ぎ、1972年に小笠原純福音教会の宣教師として赴任しました。50年間いろんな伝道や奉仕をやってきました。白馬にも福音教会があり、私はここも担当していますので、毎週礼拝に出かけます。私は自動車の運転が好きだったので、大型バスを改造してクリスチャンの本や日本の有名な本をたくさん積み込み、移動教会兼図書館のような活動を行いました。自分で運転してあちこちの教会や教会のないところへ出かけるのです。本好きの日本人がたくさんいますので、その人たちと親しく話す機会を得ることができました。

**（南アルプスグローバルチャーチ小笠原純福音教会宣教師
インゲル・ポールソン）**

回想報告「スウェーデン人宣教師アンダーソン夫妻の甲府伝道の足跡」

私は1952年にアンダーソン宣教師夫妻が甲府で開いた天幕集会に参加しました。1956年、甲府市相生町にカルバリ純福音教会が建てられ、私は1958年にここで洗礼を受けました。さまざまな集会で聖書を読み祈ることを教えてもらいました。就職してからも教会の行事に参加し、信仰を深めていきました。甲府市内の書店で大谷渡著『北欧から来た宣教師－戦後日本と自由キリスト教会－』を手に取り、興味深い本だと思い買い求めました。家に帰ってあっという間に読み終え、ノルウェー人宣教師たちの活動の詳細を知り、スウェーデン人宣教師の開拓伝道と重なっていることに感銘を受けました。アンダーソン先生の葬儀でスウェーデンを訪ねたときに、先生の日本伝道をサポートした教会のことを初めて知り、また先生を慕う親族を残して日本での伝道に生涯を捧げられたことに深い感動を覚えました。

（甲府カルバリ純福音教会員　田中 富貴子）

基調報告「北欧から来た宣教師と戦後日本の社会文化史－グローバル地域文化交流史の記録化－」

拙著『北欧から来た宣教師――戦後日本と自由キリスト教会』（東方出版刊、2018年）は、ノルウェー人宣教師たちと日本の若者たちとの交流を主題としたものであった。2020年４月採択の科研課題「北欧自由基督教宣教団と戦後期日本の社会文化史―グローバル地域文化交流史の記録化」では、これまで取り組みえなかったフィンランド人とスウェーデン人宣教師たちの日本における開拓伝道の実相に迫る研究に着手した。1950年に京都に入ったタパニ・カルナ、レア夫妻、1952年に来日したラウリ・ヘイモネン、リーサ夫妻、あるいはアンナ・マキネン、ユッカ・ロッカたち、フィンランド人宣教師の京都における開拓伝道の実相は、彼らに導かれて熱心な信徒となった京都大学の学生だったふたりから取材ができ、タパニ・カルナ、レア夫妻の孫にあたるトミ・ポエン

会場風景、左から橋寺先生・ポールソンさん・田中さん

東アジア文化交渉学会
第16回国際シンポジウム開催報告

第16回東アジア文化交渉学会は福井県あわら市の温泉旅館「清風荘」で５月10日から12日までの３日間にわたって開催されました。実はあわら市は魯迅の仙台留学時代の恩師である「藤野先生」のふるさとです。「清風荘」の後ろには「藤野厳九郎記念館」もあります。ということで、今回は魯迅研究の権威である東京大学名誉教授の藤井省三先生に『「藤野先生」と日本文学―夏目漱石と太宰治そして村上春樹』と題した基調講演をお願いしました。また、併せて中国から中国魯迅研究会副会長、北京第二外国語学院教授、趙京華先生と北京大学の王風先生、そして日本の仏教大学教授李冬木先生という魯迅研究の第一人者による「日本における魯迅を振り返る」と銘打った「魯迅研究鼎談」を大会会場で行いました。基調講演者としてはもうお一方カナダのトロント大学から Melissa S. Williams 先生をお迎えし、“Problem-Centered Political Theory Across Borders: Building on the Legacy of Shibusawa Eiichi and John Dewey” というタイトルで講演をいただきました。

久しぶりの対面での開催とあって、中国を中心に外国から200数名の会員が参加されました。オンライン参加も含めれば50パネル400名を超す大規模な学会となりました。海外からの参加者は恐らく日本の温泉につかるのは初めての経験だったと思われ、また、エクスカーションの日本海の東尋坊、中国とゆかりの深い永平寺の見学も大変好評でした。なお、今回は、福井県から多大な支援金も頂戴し、現地の福井テレビのニュースでも紹介されました。なお、次回は中国の浙江工商大学で開催される予定です。

年次大会テーマ「東アジア学の新展開」

◆分科会テーマ

1. デジタル・ヒューマニティと東アジア文化交渉の研究
2. 東アジア近代知識形成史の研究
3. 東西の宗教と東アジアの文化交渉
4. 内藤湖南など東アジア近代漢学者の研究
5. 地域国別研究と東アジアの文化交渉
6. 文学・歴史・哲学の近代知識の移転に関する研究
7. 教育・芸術分野の文化交渉
8. 医学・公衆衛生分野における文化交渉
9. 地域文化及び観光分野の文化交渉
10. その他の東アジア文化交渉に関する研究

（関西大学名誉教授 東西学術研究所研究員　内田 慶市）

東アジア文化交渉学会第16回国際シンポジウムに参加して

本年の東アジア文化交渉学会は福井県あわら市の清風荘を会場として開催された。本年３月に北陸新幹線が敦賀まで延伸し、東京からのアクセスが向上したことも、本学会が芦原温泉で開催された理由の一つであろう。

筆者が参加した「デジタル・ヒューマニティと東アジア文化交渉の研究」分科会は計６名が研究報告をおこなった。発表者の３名は KU-ORCAS デジタル・ヒューマニティーリサーチ研究班の研究員であり、各人の研究領域から DH に関する発表をおこなった。もう３名は東アジア文化をテーマに研究発表をおこなった。筆者は討論のコメントとして参加した。発表後の討論では分科会の時間の制約もあり、DHR 研究班の２名にしかコメントができなかった事が残念である。ともあれ一つの分科会で DH、仏教、生活思想という幅広いテーマの報告がなされたことも「東アジア」を冠する本学会の特徴を表していたと思う。

学会の空き時間にロビーで交流する参加者や、会場近くにある藤野厳九郎記念館の見学に行く人も多々見られた。従来の会場とは雰囲気を異にする本年の大会は、研究発表だけでなく会場そのものも深く印象に残ったのではなかろうか。

（北陸大学国際コミュニケーション学部講師・
東西学術研究所研究員　二ノ宮 聡）

会場近くの薬師神社

分科会での発表の様子

ニ、マリア夫妻との不思議な出会いによって大きく進展した。

京都大学学生だったふたりの一人からは、京都万寿寺通で1950年代終わり頃に開いた「聖書研究集会」の写真提供を受けるとともに、フィンランド人宣教師との文化的交流の心の襞に迫る話を聞かせてもらった。いま一人からは、ペンテコステ派の浸礼を受けた時と、聖霊のバプテスマを受けた時の日記を見せていただいた。

スウェーデン人宣教師たちの足跡は、甲府市の古くからの教会員が拙著『北欧から来た宣教師』を買ってくださったことから大きく進展した。シンポジウムでは、宣教師の出身地や日本における開拓伝道地域の貴重な写真を示しながら、北欧と日本の社会的文化的交流の史実と全体像を紹介した。

講演中のインゲル・ポールソンさん

講演中の西本先生

（元関西大学 文学部教授・東西学術研究所 非常勤研究員　大谷 渡）

研究報告「宣教師を日本に派遣したフィンランド・スウェーデンの都市と教会ーヘルシンキ・ボーレンゲ・ヨーテボリ」

現在のサーレム教会（フィンランド・ヘルシンキ）

戦後、多くの宣教師たちが北欧諸国から来日した。今回はヘルシンキ、ボーレンゲ、ヨーテボリの３都市を取り上げ、宣教師たちの故郷について報告した。

ヘルシンキは1950年に京都北白川で伝道を開始したカルナ夫妻の出身地で、レア・カルナはペンテコステ派のサーレム教会の創立者エイノ・マンニネンの娘であった。ヘルシンキはフィンランド大公国の首都としてロシアによって建設されたが、19世紀後半に工業化が進み人口が急増し、郊外に住宅地が拡大した。1938年にサーレム教会は労働者が多く居住する地区に大きな会堂を建設し、ペンテコステ派の中心的教会として活動を始めた。

ヨーテボリ中心部の地図

エバート・アンダーソンはスウェーデン中央部のボーレンゲ出身で、妻マリアと共に1951年に来日、甲府市で長く宣教に携わった。スウェーデンは世界有数の銅の生産地で、ダーラナ県の首都ファールンでは13世紀から産出が始まり、17世紀にはスウェーデン最大の都市だった。隣接するボーレンゲには19世紀後半に製鉄所や製紙場が建設され、鉄道の開通によって急速に発展した。

ヨーテボリはスウェーデン南西部の港湾都市で、中心部は17世紀にオランダ人によって計画された。18世紀にはスウェーデン東インド会社が設立され貿易拠点に、19世紀には産業都市として旧市街の北部に工場が、周縁には郊外住宅地が拡大した。スミルナ教会は20世紀初頭に開発された西部にあった。インゲル・ポールソンはヨーテボリ出身で、彼女を派遣したギリヤード教会は、都心から東へ約1.5キロの20世紀に都市化が進んだ地域にあった。

ペンテコステ派は会堂の記念性より活動に重きを置く。３都市はいずれも近代に工業化し、教会は工業化に則した開発地域に立地していた。出身地での経験は、戦後日本の人々が抱える課題にも通じるものであったと思える。

（関西大学環境都市工学部准教授・東西学術研究所 幹事　橋寺 知子）

図書の出版

■ 関西大学東西学術研究所資料集刊27-12

家礼文献集成 日本篇 十二

吾妻　重二 編著　　出版社：関西大学出版部

B5判上製／358頁／定価 7,810円（本体価格 7,100円＋税）
ISBN 978-4-87354-783-1　C3014（2024.3）

朱子『家礼』の儒教葬祭儀礼をめぐる闇斎学派の著述を収載する

朱子『家礼』関連文献影印シリーズの第12冊。写本でのみ伝えられた天木時中、中村習斎、稲葉迂斎、稲葉黙斎、福井敬斎ら崎門学派の著述を影印収載する。補遺として林述斎の『封禅書』を影印翻刻。神道の「神祇伯家葬送古図」が『文公家礼儀節』の翻案であることも初めて明らかにする。東アジア儒教研究の貴重な成果。

編｜集｜後｜記

復旦大学古籍整理研究所の季忠平先生が9月2日、交換研究員として本学に到着された。同研究所の初代所長、章培恒先生が2006年の関西大学創立120周年記念国際シンポジウムで講演されたことはわれわれにとってエポックメイキングであり、思えば、復旦大学と本学の学術交流が基礎となってこの文化交渉学研究拠点が形成されたといっても過言ではないであろう。これまでも同研究所から陳正宏先生、黄仁生先生といった中国を代表する文学研究者が交換研究員として本学を訪問、われわれと共同研究を推進した。季忠平先生のご専門は中古漢語と古典文献学であり、受け入れ担当者である編集子は季先生とともに日本伝来の中国古文献の調査研究に従事する。　（長谷部　剛）

表紙上掲載写真：
【右上】東尋坊（福井県坂井市）エクスカーションにて
【左下】永平寺（福井県）エクスカーションにて　　撮影：奥村 佳代子

発行：関西大学文化交渉学研究拠点
（Kansai University Institute for Cultural Interaction Studies）

〒564-8680　大阪府吹田市山手町3-3-35
TEL：06-6368-0653　FAX：06-6339-7721
E-mail：touzaiken@ml.kandai.jp
URL　www.kansai-u.ac.jp/Tozaiken/

発行日：2024年（令和6年）9月